大阪人の橋梁愛はハンドメイド 夢の浮橋、組み立てはたいへんですが・・・

夏が近づくと市内の河川は、潮の香りがまじった温気というのか、独特のにおいがするようになる。東横堀川の近くで生まれ育ち、いまも付近で生活している私には、このにおいに不快感はなく、夏の到来を感じるのである。

河川の記憶は、そのまま“浪花八百八橋”の記憶へとつながっていく。我が家の近くでいえば、市電を通すために架けられた豪壮な末吉橋や、落語の「らくだ」ゆかりの九之助橋といった橋が幼少時から渡りなれた橋で、愛おしい。堀は埋め立てられたが心斎橋や長堀橋も、また個人的に親しい橋である。

近代的に整備された市内の橋を編集し、昭和4(1929)年に刊行された『大大阪橋梁選集』(創生社)にも、これらの橋はとりあげられ、「大大阪」の底力を現代に伝えて、大阪人としてのプライドをくすぐるわけである。

いまも大阪のモダンな橋梁に魅せられた人がいる。津村長利さんである。社会人を対象に大阪大学が開講した「徴しの上を鳥が飛ぶ―文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム」に参加し、現在、アート普及の仕事を新しく立ち上げておられる。

私が講座で担当したテーマは、街全体を美術館・博物館の屋外展示場に見立て、水都大阪の象徴である河川と関係した建築や橋梁、文学、美術をはじめ、歴史資料などのアートリソース(文化資源)を、受講生が自主性を発揮して、自分ならではの視点で企画して、冊子や画像、動画にまとめることであった。

このテーマで津村さんが着目したのが、幕末明治に販売された「立版古」である。現代風にいえばペーパークラフトのことで(津村さんは「立版古」の呼称にこだわっておられる)、浮世絵師が描いて木版で刷られた錦絵を切り抜いて組み立てると、街の情景や芝居の一場面が立体的に組み上がるものである。

「立版古」に津村さんが最初に興味をもったのは、長谷川小信の鉄橋時代の心斎橋をペーパークラフトにした「大志んぱん切組とう路う浪花心斎橋鉄橋の図」であったろう。私の解説で心斎橋筋の中尾書店から復刻版が刊行され、明治6(1873)年に架けられた鉄橋の心斎橋と周辺の賑わいが再現されている。

これに触発されて津村さんは、明治42(1909)年に鉄橋から架け替えられた石橋の心斎橋を「立版古」で再現し、平成31(2019)年に大阪くらしの今昔館で開催された企画展「モダン都市大阪の記憶」でオリジナルの石橋心斎橋を公開した。私と同年配であり、現地でメジャーをいっぱいいっぱい伸ばして採寸するのがしんどいとぼやいているので、腰を痛めないか心配だが、それでもキッチリ計測できている。タフな御仁である。

水晶橋全体の「立版古」。「モダン中之島コレクション展」にて

そして前号で紹介した大阪大学総合学術博物館「モダン中之島コレクション」(7月30日まで、日祝休館)では、堂島川にかかる水晶橋の全体模型と、淀屋橋、錦橋などの照明器具を「立版古」に仕立てて展示している。どんな仕上がりになるのか楽しみにしていたが、展示台に並べられた作品を見て思わずうなった。

おもしろい。なかでも堂島川可動堰と呼ばれる水晶橋の模型は、中之島から西天満側までの全体を再現した大作だし、親柱の照明は、10分の1のスケールで展示台の上にデンと構え、アールデコを意識したデザインがレトロな化粧品の箱を思わせて際立つ。紙を切り抜いて球体を作ることに苦心した電灯も、独特の雰囲気をかもしている。

難波橋(なにわばし)の街灯。同展会場にて

これが大阪人の橋梁愛であり、熱意だろう。展示を見た人から、橋の「立版古」の個展を開いてはどうか、という声も津村さんに届けられているようである。橋の各部を津村さんが「立版古」として割り付けた展開図があるので、誰でも「大大阪」時代の名橋を自宅で再現できる。それならば、アート普及の仕事の一環として、「大大阪橋梁立版古」をミュージアムグッズにして、広く皆さんに楽しんでいただけたらと、勝手に思う次第である。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂―なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の現像―』(創元社)など。